

「ふれあい恐怖的心性」の対人関係について—インターネット調査による試み— 岡田努, (金沢大学)

青年期に頻発する対人関係の障害の一つに「対人恐怖症」がある。中でも、対人恐怖の新しい型として会食など対人関係がより深まる場面に困難を感じ、関わりから退却してしまう「ふれ合い恐怖」が指摘されている(山田,1989 など)。岡田(2002)は一般大学生において見られるふれ合い恐怖的心性と不安を感じる対人場面との関係について検討し、山田による臨床的記述と同様の傾向を見出した。しかしこの対人場面に関する項目は作成以来 10 年以上経過し若干陳腐化した項目表現も見られる。よって本研究では不安を感じる対人場面について項目の加筆修正を行い対人恐怖及びふれ合い恐怖的心性との関連を再検討するものである。

一方近年、社会調査の分野を中心にインターネット調査が急速に広まっている。現代においては、情報端末機器が多くの人々に日常的に利用されるようになり、こうした調査形態が一部特殊な技術指向性を持った対象者にした通用しないと言い切れなくなってきた。特に調査会社の登録モニターが回答するクローズド型インターネット調査について、轟・歸山(2010)はそのメリットとして、広範囲な地域から回答者が得られること、調査実施に関わる各種コストの削減、回収率を維持しやすいことなどを挙げている。

しかしながら心理学的変数において従来の紙媒体による質問紙調査との結果の相違については十分に明らかとはなっていない。よって本研究ではまずインターネット調査を先行して実施し、紙媒体質問紙調査との比較のための基礎資料を得ることも併せて目的とする。

方法

予備調査 大学生に対して、日常経験する対人場面で、不安に感じたり、自分の居心地が悪く感じたりする場面について自由記述で尋ねた。評価には独立行政法人メディア教育開発センターが開発した REAS(リアルタイム評価支援システム)を用いた。有効回答数は 6 名(男子 2 名, 女子 4 名)、実施時期は 2013 年 6 月であった。

本調査 マクロミル社によるクローズド型インターネット調査を利用した。これは予め登録されてある回答者集団に対してインターネットサイト上の質問紙に回答をしてもらうものである。回答はすべて匿名であった。実施時期は 2013 年 7 月であった。

回答者 国内各県の 4 年制大学学生および卒業者 206 名(男女それぞれ 103 名 19 歳~25 歳)であった。

質問項目 1) 不安場面項目 岡田(2002)が作成した項目のうち表現が陳腐化したものを訂正しこれに予備調査に基づいて作成した 4 項目を加えた 40 項目の対人場面について、安心度を尋ねた。選択肢は「1 そのような場面は経験がない」「2 とても不安である」~「7 とても安心できる」の 7 段階であった。

2) ふれ合い恐怖的心性尺度 岡田(2002)において作成されたもので「関係調整不全」「対人退却」の下位尺度から成る。「1 まったくあてはまらない」~「6 とてもあてはまる」の 6 段階であった。

3) 対人関係尺度 永井・岡田(1987);永井(1994)が作成した一般健常者における対人恐怖的心性に関する尺度で以下の下位尺度から成る。集団にとけこめない、気恥ずかしいなど対人状況における自分自身の行動、態度、話し方、振る舞いなどにおける支障を示す「対人状況における行動・態度の諸特徴(以下「対人状況」と表記する)」、対人場面で他者からどのように見られているかという問題意識である「他者との関係における自己意識」(以下「関係的自己意識」と称する)、自分自身に対する自信のなさを示す「内省的自己意識」である。「1 まったくあてはまらない」~「6 とてもあてはまる」の 6 段階であった。

結果と考察

不安場面項目について「そのような場面は経験がない」への回答を欠損値とみなし多重代入法による欠損値の推定を行った(他の選択肢への回答については 1~6 点に換算した)。項目間相関を求め 5 種の代入値間で統合された相関係数を入力変数とした最尤法による探索的因子分析を行い、3 因子を抽出した。PROMAX 回転後、4 以上の負荷量を持つ項目を解釈した結果、岡田

(2002)と同様に「1 公的場面・年長者の前」「2 心情的に遠い他者との場面」「3 心情的に近い他者との場面」と解釈された (Table 0)。

Table 0 不安場面項目についての因子分析結果 (パターン行列)

項目/因子と.4以上項目の係数(各挿入値での範囲)	I :.926 ~.928	II :.911 ~.916	III :.865 ~.869	共通性 (抽出後)
2 サークルや部活でOBやOGとまじめな話しをするとき	.790	-.164	.062	.481
32 授業で先生に指名されて答えるとき	.758	.090	-.211	.650
40 大学の先生が出席している飲み会や食事会の席	.727	-.095	.142	.490
11 大学の先生と勉強についての話しをするとき	.706	-.140	.296	.521
36 授業で発表するとき	.701	.108	-.171	.582
17 授業で自分から質問しているとき	.652	.154	-.038	.583
26 大学の先生と雑談するとき	.630	-.044	.275	.497
23 集会などの公式の場で、自分の意見を言わなければならないとき	.610	.253	-.142	.622
20 ずっと年上の他人と雑談するとき	.562	.083	-.005	.389
8 サークル・部活のOBやOGが出席している飲み会や食事会の席	.530	.128	.125	.448
29 大学の事務のひと、事務手続きの話しをするとき	.525	-.001	.272	.406
5 サークルや部活でOBやOGと雑談するとき	.517	.092	.219	.451
22 初対面の人に自己紹介するとき	.507	.381	-.298	.637
25 初対面のひと、会議をするとき	.484	.370	-.244	.585
14 キャッチセールス(電話セールス)の販売員と話すと	.460	-.144	.014	.138
4 特別に親しい程でもない友だち(同性)と、一緒に食事をするとき	-.183	.919	-.099	.595
10 特別に親しい程でもない友だち(同性)と、雑談するとき	.063	.700	.050	.584
35 友だちの友だちと二人きりのとき	-.061	.644	-.058	.342
3 同じ学科やクラスの学生たちと一緒に食事をするとき	-.182	.636	.403	.564
13 特別に親しい程でもない友だち(同性)と、行事の打ち合わせなどの会議をするとき	.147	.601	.039	.529
33 友人の他に、直接には知らない学生が同席している場面	.141	.592	-.044	.473
9 同じ学科やクラスの学生たちと行事の打ち合わせなどの会議をするとき	.102	.542	.313	.601
19 初対面のひとと雑談するとき	.304	.540	-.164	.572
31 恋人以外の異性の友人と雑談するとき	-.015	.516	.275	.419
1 数回話したことがある程度の人と道ですれ違うとき	.190	.485	-.043	.390
6 同じ学科やクラスの学生たちと雑談するとき	-.012	.471	.460	.560
28 恋人以外の異性の友人と一緒に食事をするとき	.130	.457	.124	.369
16 初対面のひと、一緒に食事をするとき	.386	.450	-.209	.554
38 アルバイトで、接客するとき	.190	.425	.120	.389
39 昔の知り合いに久しぶりに会うとき	.014	.382	.266	.289
7 特別に親しい程でもない友だち(同性)と、勉強の話しをするとき	.295	.310	.133	.374
21 親しい同性の友だちと一緒に食事をするとき	-.043	-.073	.867	.708
18 親しい同性の友だちと雑談するとき	-.139	-.018	.826	.650
15 親しい同性の友だちと勉強の話しをするとき	.122	-.039	.727	.555
12 親しい同性の友だちと行事の打ち合わせなどの会議をするとき	.124	-.089	.660	.439
34 兄弟や姉妹と雑談するとき	-.078	.042	.635	.403
24 両親と雑談するとき	.214	-.313	.624	.367
30 知っている仲間同士の飲み会や食事会の席	-.026	.188	.600	.453
37 サークルや部活の友だちと雑談するとき	.014	.231	.534	.424
27 恋人と話すと	-.062	.081	.464	.230
負荷量平方和(抽出後)	13.359	4.634	1.322	

各因子を代表する項目について合成得点を求め、他の尺度得点との間での欠損代入値について統合された相関係数を求めた。また、岡田(2012)において関係調整不全感が対人退却という行動を引き起こしていると考えられたことから、関係調整不全ないしは対人退却を統制変数として、他方の変数と不安場面項目の間の偏相関係数も求めた。Table 1 と Table 2 に結果を示す。

ここに見られるように、「公的場面・年長者の前」「心情的に遠い他者場面」は関係調整不全との相関(偏相関)が見られる一方、「心情的に近い他者場面」では対人退却との偏相関が見られた。すなわち、山田が述べるように、心情的に近い他者との間でのふれ合い状況は、まずふれ合い恐怖を高めこれが「対人退却」との関係に表れていると考えられる。一方、「関係調整不全」は偏相関が0に近く直接にはこうした場面からの影響は受けないものの、疑似相関が見られることから、対人退却の結果として退却が生じたものと考えられよう。一方「公的場面・年長者の前」「心情的に遠い他者場面」については、対人退却の効果を除いてもなお、直接的に対人退却との関連が見られた。これらの場面は、従来型の対人恐怖においても不安が生じやすい場面(出会い場面)と考えられる。すなわち、ふれ合い恐怖以外の従来型の対人恐怖によって生じた退却が示されていると考えられる。

対人関係尺度得点との関連においても関係調整不全と同様「対人退却」を統制した「公的場面・年長者の前」「心情的に遠い他者場面」に相関関係が見られたことから、同様の側面が現れたものと考えられる。関係調整不全を統制した場合にもこれらの場面での相関関係が見られた。これは、ふれ合い恐怖的心性を除去した従来型の対人恐怖的心性が、このような近くない他者への不安感を表していることを示している。言い換えれば「関係調整不全」下位尺度はふれ合い恐怖的心性と従来型対人恐怖の両側面が含まれた概念であることが示唆された。

引用文献

岡田努(2002).現代大学生の「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察 性格心理学研究,10,69-84.

岡田努(2012).青年期の「ふれ合い恐怖的心性」と「傷つけ合うことを回避する」傾向の関連について 日本教育心理学会第54回総会論文集,606.

轟亮・歸山亜紀(2010).轟亮・杉野勇(編)入門・社会調査法 2ステップで基礎から学ぶ 第2版 pp.114-129.

山田和夫(1989).境界例の周辺:サブクリニカルな問題性格群 季刊精神療法,15,350-360.

訂正箇所

Table 1,2 での「対人退却」と「関係調整不全」が逆になっていました。またp3L5 からの考察も同様です。

Table 1 ふれ合い恐怖尺度と不安場面項目との相関 ()内は偏相関

	公的・年長者	心情的に遠い他者	心情的に近い他者
対人退却	-.208**(.004)	-.338**(-.118)	-.375**(-.302)
関係調整不全	-.333**(-.266)	-.402**(-.259)	-.233**(.006)

統合された偏相関係数については有意性検定結果は算出されない

Table 2 対人関係尺度と不安場面項目との相関と偏相関

	公的・年長者	心情的に遠い他者	心情的に近い他者
対人状況	-.452**	-.504**	-.227**
偏相関係数			
対人退却を統制	-.440	-.398	.054
関係調整不全を統制	-.330	-.332	-.069
関係的自己意識	-.403**	-.404**	-.156*
偏相関係数			
対人退却不全を統制	-.354	-.285	.048
関係調整不全を統制	-.242	-.142	.062
内省的自己意識	-.357**	-.356**	-.206**
偏相関係数			
対人退却を統制	-.297	-.211	.011
関係調整不全を統制	-.165	-.074	-.040

統合された偏相関係数については有意性検定結果は算出されない